
切り裂き花子

takosashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切り裂き花子

【Nコード】

N5067T

【作者名】

takosashi

【あらすじ】

ある都市伝説。人の頸動脈を切ってしまうという、「切り裂き花子」は実在するのか？ シンイチはある夜、友達から聞いた特徴にそっくりの、「切り裂き花子」に遭遇するが…

（前書き）

本当の恐怖は小説の中ではなく、むしろ日常にある……そんな物語を書いてみました。

シンイチは、コンビニで、カップラーメンと、おにぎりと、アイドル雑誌を買い、深夜の街を歩いていた。

一人暮らしを始めて、半年になる。高校を卒業したあと、都市部の専門学校に進学した。

今夜も、友達の家で話しこんだあと、コンビニに寄った。帰る途中にはコンビニが2つあるけれど、今日はアイドル雑誌が欲しかったので、いつも30歳くらいのおっさんがレジを打っている方のコンビニにした。家に近いほうの、綺麗な女がいるコンビニでは買いづらい。

「切り裂き花子、っていうんだよ、それが」

「ああ、聞いたことある、おれ」

「自転車に乗っていて、すれちがいざまに、ナイフで頸動脈を切るんだってよ」

「ええ？ ウソだろー？」

「黒いワンピースに、赤いスカーフ、それと白い帽子をかぶって…」

「つーか、頸動脈って、切られたら助からねーだろ？」

「ときどきこの辺に出るんだってよ」

「都市伝説じゃねーの？」

そんな友人との会話を思い出していると、後ろから、ちりりりと音がした。

振り返ってみる。

黒いワンピースの女が自転車に乗っていた。しかも、赤いスカーフを首に巻いて、つばの広い白い帽子をかぶっている。

こちらへ向かってくる。

（切り裂き花子…?!）

シンイチはどうするか一瞬迷った。まさか話どおりのことに本当に出くわすとは思っていなかった。友人たちの言っていることが本当なら、このままでは頸動脈を切られてしまう。

逃げるべきだろうか？ でも超人的な速さで追いかけてくるかもしれない。なんたって相手は怪物なのだ。

やつは、多くの人の頸動脈を切っている。

そうだ、やられる前に、やつつけてしまえばいい。生かしておいたら、犠牲者はもっと増えるだろう。

でも、オレは怪物をやつつけるような腕っぷしはない。なにか武器はないか…

このアイドル雑誌…使えないかな。

雑誌だから紙だけど、綴じてあるところの折り目でひっぱたいてやれば…

「切り裂き花子」がすぐそばまでやって来た。

シンイチは、横なぎに、アイドル雑誌の折り目を思い切り振り回した。

「きゃああ！」

妙に可愛い悲鳴だった。シンイチが武器に使ったアイドル雑誌は、バラバラになって、飛び散った。

あまりに力が入りすぎて、叩くというより投げつけるといった感じになった。

「切り裂き花子」は自転車ごと転び、歩道に倒れた。

シンイチはその場に立ちつくし、斜め座りをしている「切り裂き花子」と見つめあう格好になった。

結構、きれいな女だった。牙か角でも生えているかと思ったのに。

2人の男が、走ってくるのに、シンイチは気づかずじっといた。

「切り裂き花子」はそれを見ると、あわてて逃げ出した。

2人のうち1人が、シンイチに話しかけた。

「警察だ。ちょっと話がある。その車に乗ってくれるか？」

シンイチが乗せられた車には、2人の刑事が…若いのと、老けたのとがいた。

若い方が言った。

「そういう噂があつて…きみはあの女を叩いたんだな？」

「は、はい」

「殺される、と思ったからか？ 確かにきみは、あのままでは殺されていたかもしれないな。『切り裂き花子』じゃなくてももっと別の奴にな」

「…？」

老けた方が、タバコをプカプカやりながら、馬鹿にしたように言った。

「それにしても、もっと他に気のきいた呼び名はなかったのか？」

『切り裂き花子』だって？ アホらしい…どっちみち、これで捜査は一からやり直した」

「えっ？」

「あの女は、違法デートクラブの社員だ。デートクラブって何か教えてほしいか？」

つまりこうだった。女の子とエッチをしたい男が、ある番号へ電話をかける。その番号には、男とエッチをしたい女の子が「待機」

していて、話がうまくいけば、その仲介役の「クラブ」にお金を払い、外で待ち合わせをして、エッチをすることができる。

…というのが、表向きの話だった。

実際には、電話に出る女の子はすべてその「クラブ」の社員。話が合って、女の子が来て、ホテルに入ろうとすると、とんでもない額のお金を要求される。払うのを渋っていると、ヤクザが現れて、結局は有り金すべて、恐喝されてしまう。

「…そして、待ち合わせをする時、女は必ずこう言う…黒いワンピースと赤いスカーフ、それと白い帽子を見たらあたしだと思ってとね。あの道には1日のうち4回くらい、黒いワンピースと赤いスカーフと白い帽子の女が自転車を通る…これが、『切り裂き花子』の正体だ。いいか、きみの将来のために、言っておくぞ」

若い方が言った。

「友達の話を鵜呑みにしていないで、自分自身で善悪を判断しろ。そして、臭いところには、近づくな。日なたの明るい道を、歩くんだけ。『切り裂き花子』は頸動脈なんか切らないが、きみたちを食いものにし、大切なものを奪う」

シンイチは呆然としていた。初めて垣間見た、本当に怖い、大人の世界だった。

老けた方が言った。

「いちおう…住所と名前、教えてくれるか？」

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5067t/>

切り裂き花子

2011年10月9日01時23分発行